

IR ワークショップ

大分大学 アドミッションセンター 講師
本研究所研究協力者 堺 完

第 70 回公開研究会「私立大学の IR ～データの共有と活用～」では、1. 趣旨説明、2. 事例報告、3. データ活用事例とワークショップの説明、4. IR ワークショップを行った。ワークショップでは、参加者が個人ワークとグループワーク、ディスカッションを通じて、自大学及び他大学の IR の現状について共有し、私立大学でのデータ共有や公開の可能性について議論し、その結果を報告して共有してもらった。

ワークショップの参加者は 75 名であり、同一機関の参加者や役職が多様になるよう構成して、12 グループに編成した。ワークショップでは、①個人でワークシートを作成する→②それに基づきグループで私立大学の IR の現状を意見交換する、③グループ課題についてディスカッションをして模造紙にまとめる→④その成果を報告し、全体で共有する、という 4 段階の流れで進められた。ワークシートおよびグループディスカッションで取り組んでもらった課題は、次の 3 つである。

まずワークシートでは、「貴学の IR の現状を簡潔にまとめてください。なお、現状を記述するにあたって、下記の①～⑧の内容をいくつか含めて書いてください。」と指示が与えられ、各参加者の所属する大学の IR の現状を以下の 8 つの観点「①IR の設置の有無、②IR の設置年、③IR の人員や組織体制、④IR に求められている役割や喫緊の課題、データ入手のしやすさ、⑥データ集計や分析内容、IR に対するトップ層／他の部署の職員／教員の理解、⑧IR を導入してうまくいったこと／いかなかったこと」に沿って、書ける範囲でまとめてもらった。次にワークシートに記載した内容をもとにグループ内で各人 2 分程度で報告して共有をしてもらった。そこまで済んだら、グループ課題である日本の私立大学においてデータシェアの可能性について、「私立大学における（学内）のデータ等の共有状況と、（学外に対する）データ等公表・公開状況を踏まえて、今後必要になる他機関とのベンチマークに備えたデータ等の公開・共有の可能性についてディスカッションをしてください。」に関してディスカッションを行い、その結果を模造紙にまとめて、ワークショップの後半でグループプレゼンテーションをしてもらった。

以下では、各グループからプレゼンテーションにおいて説明のあった内容を 5 つの観点で整理して紹介していく。また各グループが報告用に作成した模造紙については、別途掲載するのでそちらも合わせて参照してもらいたい。

○ データシェアのニーズ

- ・仮に他大学とデータ共有できるなら、学生の入試データや就職先の詳細、留学に関する情報（受け入れ／送り出し）、奨学金等の経済的支援の状況などがあれば望ましい。
- ・比較分析のニーズとして、入試分析や就職先と GPA の関係、国家試験の合格率などである。ベンチマークを行うなら、就職状況や学生生活調査は共通設問項目で実施して行うのが良い。
- ・公開や共有の難易度が高いが是非知りたいと思うのは、ST 比や科目数、履修数といった教学関連データ、教職員の人件費などである。
- ・教育情報に関して共有が進みデータ分析が容易になったら、見たい情報がすぐ見られる可視化ツールなどがあるとさらにいい。

○ インフォメーションシェアのニーズ

- ・データシェアを進める前に、どのようなデータを使って集計や分析を行っているかといったシェアも必要ではないか。
- ・大学の事例を共有する場があればいい。規模や特性が近い大学間で IR の進捗や課題をシェアできるといい。そうすることで自大学の立ち位置が確認できる。

○ 公開する情報や共有するデータの定義や範囲

- ・誰のために、何のために情報を公開し、データを比較するのか、その目的が重要である。
- ・共通の問題を抱える大学同士でデータシェアするには賛成意見が多いが、共有しているデータを公開するのは一部の大規模有力大学を除いてあまり好ましくはないのではないか。データが公開されると大学以外の、例えばマスコミや教育産業などにもデータが恣意的に使われることにもなりかねないので、何を公開するかについては、慎重に検討する必要がある。
- ・現実的に情報公開やデータ共有するのであれば、大学ポートレートに記載されている教育情報が限界ではないかと思う。
- ・データシェアを行うには、情報セキュリティやデータ取り扱いの点でまだまだ課題が多いが、まずは共有しやすいところから徐々に行っていく方がいいのでは。例えば、学校基本調査や大学ポートレートなどの公的調査ですでに多くの大学が提供している教育情報関連である。
- ・教学データではそれほど問題にならないが、大学によって教職員の範囲や定義が異なっていることもあるので、共有するならデータの定義が重要である。

○ 共有や比較する対象

- ・大学単位であれば同じ規模や学部編成で比較がより有益である。
- ・データシェアを行うのであれば、専門分野別で行うのが望ましい。

- ・シェアの規模や単位をどうするか。大学規模か、学部・学科規模なのか。
- ・学生の就職に関する情報といったすでに多くの大学にて公開されているデータや情報は、データの公開・共有のハードルが低いが、学生の成績情報や休退学の情報など、共有のニーズは高いけれど、個人情報との兼ね合いがあって公開・共有のハードルが高い。対応策として、例えば大学名や所在地区などを伏せた上で、複数の大学でデータを出し合って活用できるようになればいいのでは。
- ・データシェアリングを行うのであれば、近くの競合校でなく、地理的に離れたところにある同規模同類系の大学同士で行いたいという意見があった。

○ データシェアリングを行う上での運営主体

- ・専門分野が同じ大学同士でコンソーシアムなどを形成し共有する。
- ・コンソーシアムといった大学同士の連携では限界もあるので、私学関連団体や私学事業団といったところが中心となって、データの共有を後押しする仕組みや取り組みを充実させてほしい。

上記以外にも、IR 部署が組織化されていないメンバーが多いグループでは、データシェアや共有の在り方ではなく、IR を促進する上での課題や方策について議論しているケースもあった。そこで話し合われた内容については、何のために IR を行うかという組織全体における IR の在り方や目的、データの収集方法や各種調査の実施方法などについてであった。

最後の西井主幹の総括の中で、IR がなぜ必要なのか、特に私立大学が健全な経営を行うには、数値やデータに基づいた判断が不可欠であり、そこに IR が果たすべき役割があると言及があった。大学によって当然問題となっている内容は異なることから、データの収集や分析を行うには、例えば同様の規模や地域の大学とのデータ比較を行って自分たちの組織が直面している問題を、より正確に理解をする必要がある。データによる検討なくして、経営改善策や中期計画など立てられるはずもなく、IR は経営問題を浮かび上がらせるようなデータの収集と分析を積極的に行うべきであると発言をもって、会を締めくくった。

今回のワークショップは、IR 組織が少なかった前回の IR 公開研究会とは異なり、IR が端緒についたばかりである大学や、試行錯誤しながら IR を推進している大学があるなど様々な中で、私立大学における情報公開とデータ共有の現状確認及び IR 業務担当者がデータの利活用をめぐるどういった現状や課題を抱えているか、その現状を把握し、今後データ共有や活用を推し進めるにあたっての方策や支援の在り方などを探る一環として企画した。情報及びデータの公開や共有を行うにあたって様々な課題があることが改めて確認できたが、以下の点を引き続き検討する必要がある。第一に、情報やデータを公開・共有する目的を明確にし、どの範囲でどういった公開・共有を行うか定義を決めること、第二に、IR 業務等でどこの大学においても必要になるデータが何であるか、共通項目を決めること、第

三に、規模や学部構成など特性に近い大学同士でデータや IR の進捗を共有する場や機会を作る事、などである。データの公開や共有の定義とその範囲については、大学の置かれている状況で温度差はあると思われるが、グループプレゼンテーションの中でもあった、すでに公開されている教育情報や共通設問内容の学生調査などを実施して、データ共有の可能性を探っていくのも手であろう。また公開や共有を進めていくにあたって、共通項の多い大学同士でデータ共有や比較を行い、また IR の推進状況や具体的な業務の中身などについても共有することで、より有意義なベンチマークが可能になると考えられる。いずれにしても継続的にこのような IR の現況を共有する場が、IR 担当者から求められている点を付け加えて、IR ワークショップの概要を終えることにする。

A

データシェアの目的

目的がはきりしない限り
利用できるデータの範囲は少ない。

特に小規模の私立大学では

言葉是員の明示 ← データ収集、分析

この流れでのIR活動が有効
... とすると、利用するデータは大学の小情報のみではな
ex). 統計局のデータ
市販の小情報誌

データシェアに向けた言葉是員
(負担、不安) を踏まえると
必要最小に疑問を交える

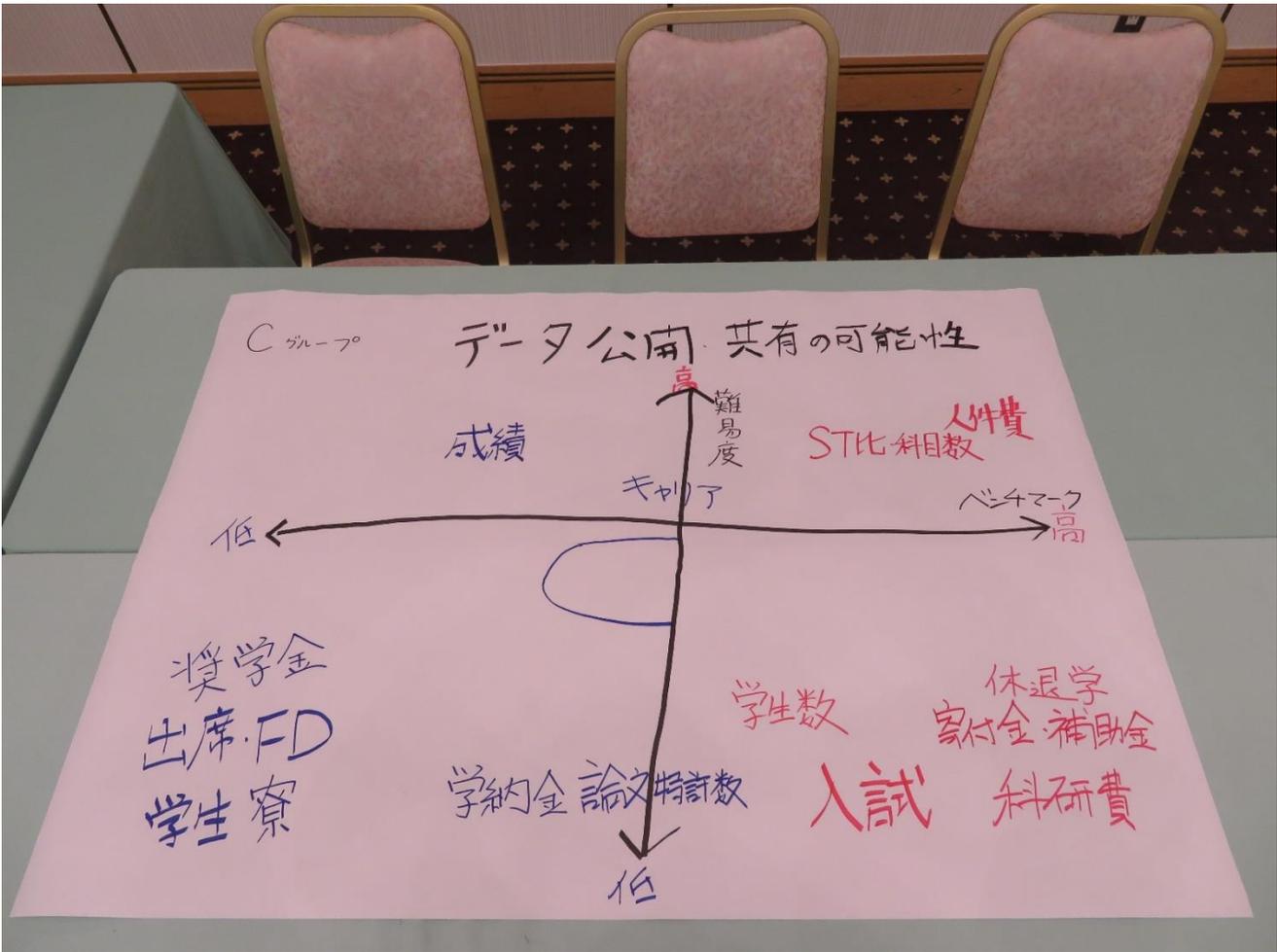
Bグループ

<データシェアは可能か>

- 経営の教学
- どのレベルのデータシェアするか

<データシェアの目的・必要性>

- データ共有・立ち位置の確認
- ランキング比較のため公開は?
- 規模・大学特性考慮
- どのようなデータ共有したいか。
- 目的を共有した学間シェア





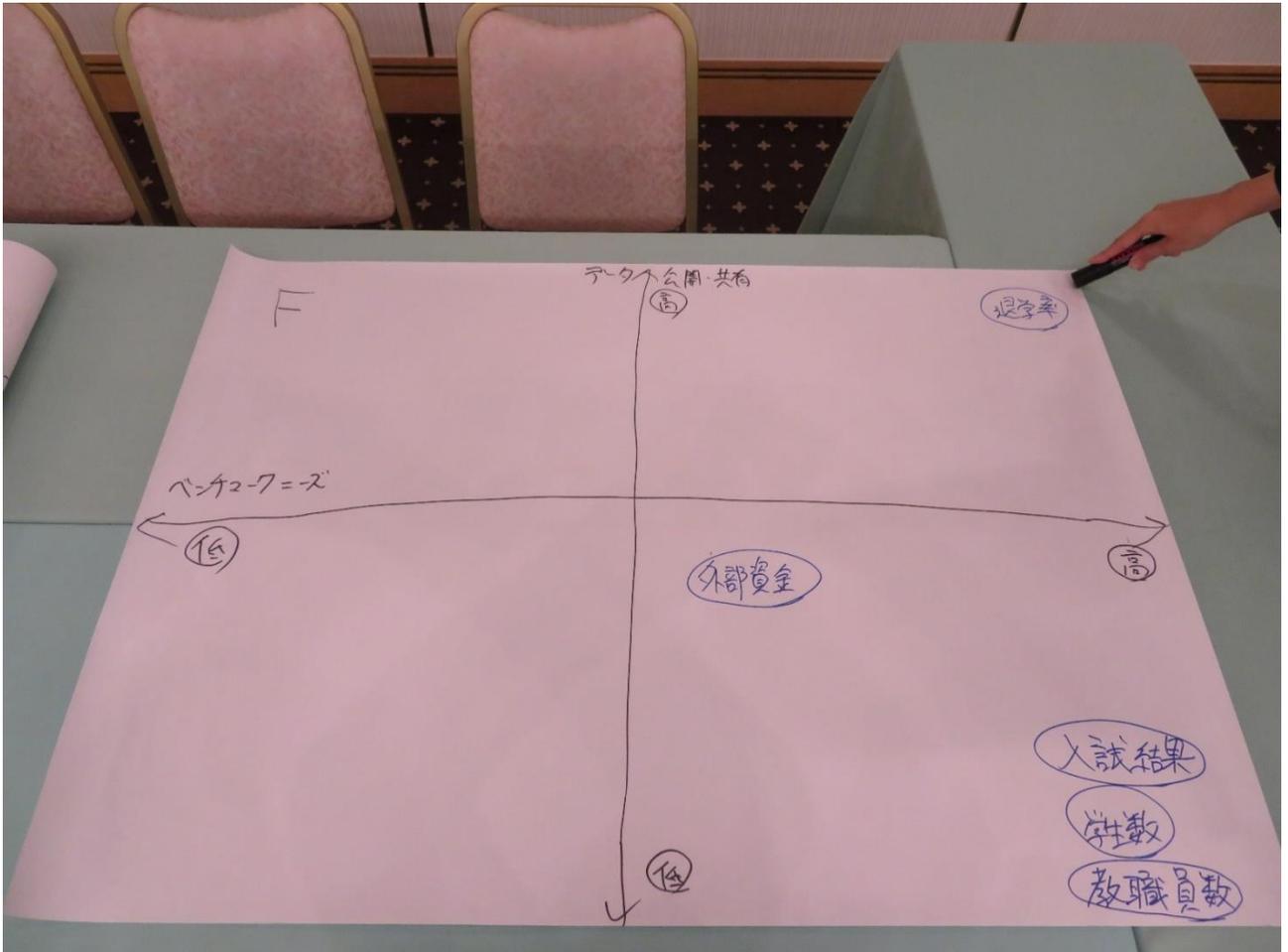
E

① データシェアの可否

可能。ただし、自大学の名前を情報公開時に公表されてしまうことには抵抗あり。

② データの共有の有用性

有用性は有り。ただし、データを共有分析する際には、同分野の学部学科や偏差値帯の大学と比較する必要がある。



IRの効果



- 組織的 リーダーシップが必要
- データベースの共有 現場の理解が必要(個人情報)
- 不要な情報も多い。

専門の人材(教職員) 事と教員の連携が重要

必要データは多い。

① F

① 班の設置 1名相当 協議段階
各課でデータ 教員とキリコ
教員の意識低い 研究(IR)段階

② 室の設置 後部 1名 IRの調査段階
認証評価対応 各部署で分析 知事分析で対応

③ 2014 ^(教員) 学長室 ⇒ 2019 ^{企画室(教員)} IR 認証評価
教員との架け橋 データ収集もおぼつかない

③

大学評価 IR室 (2018) ^{中心}

④

試行段階 認証評価 ~~対応~~ 補助金対応

中計に IR体制の確立 教学データ中心

^{執行部}

教員からのアンケートによる分析

⑤

IR推進セカ ^{1名} ⇒ ²⁰¹⁸ 学長室 企画調査課 (認証評価含む)

IR推進委員会の設置

^{事務局}

学生調査の実施 学事課のデータ

① 教員 のデータ データの加工分析が課題

具体的な改善につながらない

(F)

(6)

企画課1名に担当。情報収集が開始のころは、
入方式と単位履修状況のとりわけある程度はわかる。
認定評定をとおして全学的意識が高まった。
システム構築が中心にIRを整理して

(7)

2019 選
各部署では収集のしかた全学的に調査分析した、という、
情報収集の円滑化。ICT担当が重要

IRの意義が理解されつつあり、

責任の所在が不明確。組織的な取組にならな

現状にあわせて構築している段階。

G

データの内容による

項目だけでなく

定性的データ

出せるデータ

事業団などの社内
データ

ベンチマーク可能

目的による

学部による

出しにくいデータ

トップの理解不足

IT以外

同じタイプのデータ

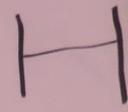
正確に扱えない

データ活用の意味

数値データ 内情を知る
もの

学内のデータ共有

- ・システムの問題(入学・教学)
- ・セキュリティ



データの活用

- ・入試
- ・就職
- ・複合相関
- ・中退
- ・合格率(国試)

公有化
・カタログ化(項目)

可能

ベンチマーク化している

- ・就職分野
- ・学生生活調査
- ・項目の共通化

誰が何のための共有

他機関
・コンソーシアム
・ALCS

インフラ

私立大学においてデータフェアの可能性

学内のデータの共有状況

- ・専任教職員が全学生のデータを見られる
- ・部署や担当による学生データの公開範囲が異なる
- ・BIツールの利用

「大学ポータル」に公開している内容が限られる

ネガティブ情報・改善提案を公開すべき

学外データで見たい内容

- ・就職に関する数値, 詳細
- ・入試データ
- ・留学者数
- ・奨学金貸与者数
- ・履修科目数

① データの基準をそろえた上でシェア Jグループ

② 既に公開されているデータは公開難易度低い

③ 公開難易度が高いデータも統一した基準で分野系統をそろえて匿名性を高めればシェア可

↳ 私大協にとりまとめをお願いしたい。

学部系統別データベースの統一プラットフォーム

K

現状

- 分析 → 施策への転換 (難)
- シェアしたいのはデータも 方法
ノウハウ
- データとしてほしいものは 入試
休退学
- 比較したいのは 同業他社
- 同業他社は敵存のぞ 公的機関に期待!!
(リベラ)

グループ 目的・役割

▷ 学内の意志決定や
改善活動の支援

課題 IR 情報の収集方法

組織・担当

▷ 経営に近い組織

一括して情報^収集できる

データ

▷ 収集したデータを分析し
各部署へ提供
使いやすい工夫が必要

認知・雰囲気

▷ 組織内での認知理解
向上